2022年11月30日～12月4日、損保ジャパン人形劇場ひまわりホールにて公演

キョウコ

ゲサク

ヤスオ

2022年12月23日～25日、損保ジャパン人形劇場ひまわりホールにて公演

Review

人形劇だからこそ再会できた40年前の『寿歌』の原型

人形劇『寿歌』を見て、私は40年前に初めてこの作品を見た時のことを思った。というか、40年前と同じような衝撃と感動を受けたのである。それは『寿歌』という作品の原型に再会したという感触でもあった。その後さまざまな『寿歌』を見てきたが、今回のようなシンプルな衝撃と感動を受け取ることはあまりなかったように思う。おそらくそれは人形劇というスタイルによってもたらされたのではないか。

放浪の旅芸人ゲサクとキョウコが、ヤスオという青年に出会い、ひととき共に旅する話である。たわいのないのんきな道行きと見せつつ、その奥底に、生きることの根源的な哀しみや、その哀しみからの宗教への希求が静かに息づいている。その2つの強い訴求力で、北村想の原点といえる作品だ。40年前はそれらへの理解がないまま、ただただその訴求力に心動かされて涙し、今回は時を経て作品構造への理解が多少はあったにもかかわらず、やはり2つの訴求力に心を動かされて涙している自分がいた。原型に再会したと思えたのは、その感動の質が同じだったからだ。

そしてそれをもたらしたのは、人形劇だからだ、と思うのだ。そもそもこの作品の3人は、いわゆるリアルな登場人物ではない。神の化身を思わせるヤスオだけでなく、ゲサクは人間の苦悩の象徴であり、キョウコもまたそうした人間が求める一種の救いのような、聖少女というシンボリックな存在だ。生々しい俳優の身体性を拒否するものが、役自体の中にある。大地にしっかり足をつけた人間たちのドラマではなく、大地から少し浮き上がっているような世界なのだ。人形だからこそ、その世界が容易に実現した。そして、ザ・ピーナッツの「ウナセラ・ディ東京」や終幕にキョウコが歌うテーマ曲を、大事に生かした音楽の力もあって、透明感あふれる舞台をつくったのである。

演劇評論家・プロデューサー　安住恭子

Report

回り回って喜びを得た『夢の検閲官』制作裏話

『夢の検閲官』は筒井康隆氏が1987年に書いた短編小説。僕はこれを『夜のコント・冬のコント』という文庫で読んでいるので、それよりもう少し後で読んでいる事になる。以来およそ30年、いつか人形劇にしたいと考え続けていた。昨年末、愛知人形劇センター（以下センター）のプロデュースでそれを形に出来たのは、とても喜ばしい。しかも、ゆめみトランクの若い二人と一緒に舞台をつくれたのも嬉しい事だ。

2020年3月、コロナによって上演やコンサートが次々に中止になっていく中、時の文化庁長官が「文化芸術に関わる全ての皆様へ」というポエムと評されたメッセージを発表した。ドイツなどでは具体的な支援策が施された時期で、案の定の大炎上。そこから4カ月ほどして、文化庁はようやく「文化芸術活動の継続支援事業」をスタートさせる。ここから一連の具体的な事業が始まったという意味では大炎上を引き起こしたこのメッセージは効果があったのかもしれないが、それこそ筒井氏が書きそうなブラックジョークのような出来事だった。

その継続支援事業で、この『夢の検閲官』の試作を僕は始めた。美術は吉澤亜由美さんに依頼した。当初はコロナ対策を含め、二人の人形遣いが別々の人形劇舞台で演じるという形式をとった。その形がしっくりこなかったので、人形でやる別の形や人間と人形でやる形など数稿の脚本を書いてもみた。そんな頃、センターの中康彦プロデューサーと何かで話をした折に、ARTS for the futureというこれまた文化庁の支援事業が話題となった。『夢の検閲官』をゆめみトランクの二人と三人で演じるアイデアで、これに申請をしてはどうかと話したのだと記憶している。

センターの理事の方々の検討を経て、中プロデューサーがフォーマットを整え申請。無事助成が確定したところで、具体的な日程の調整が始まった。センター主催の『人形劇 寿歌』の公演もあって、稽古日程の調整は難航。美術プラン出しの稽古以外は12月直前の稽古で一気に仕上げるという事になった。ところが夏の美術プランのための稽古直前に僕がコロナに罹患。開始が遅れた上に、寝ていたせいで腰痛に悩まされての稽古となり苦難の船出だった。美術も遅れをみせ、12月の稽古の入りは不安の中だった。時期的な事もあり集客にも苦労をし、公演中日の12月24日朝には名古屋では稀に見る大雪が降った。

こう書くと逆境だらけ。困難しかなかったようだが、二人との稽古はとても充実した楽しいものだったし、お客様にも概ね好評だったようで、この先もこの作品を続けて上演出来る事も見えてきた。

正直、自分が生きているうちにパンデミックなんて事が起こるなんて考えてもみなかった。長く生きると色んな経験をするものだ。その中でもあきらめずにチャンスをうかがっていれば、こんな事もあるんだなと思う。ウイルスと文化庁長官への炎上騒動が、僕にとっては、回り回って一本の芝居ができるきっかけとなるなんてねえ。

人形芝居燕屋・『夢の検閲官』脚本・演出
くすのき燕

P新人賞2022は誰の手に……！

P新人賞の「P」とは、人形劇（PUPPET）のP、オブジェ＋身体によるパフォーマンス（PERFORMANCE）のPです。人形劇ジャンルの明日を担う斬新な才能を発掘するために開催され、今年で12回目を迎えます。

今年度のP新人賞2022へは、4団体からの応募があり、CORONA（光環）、魁士、舞台アート工房・劇列車の3団体・個人が最終選考上演会へ進むことになりました。P新人賞2022最終選考上演会は、2023年2月18日（土）・19日（日）の2日間、損保ジャパン人形劇場ひまわりホールにて開催します。ぜひ、ご来場ください！

P新人賞2022最終選考上演会
2月18日（土）19:00、**19日（日）**14:00
損保ジャパン人形劇場ひまわりホール
前売2,200円　当日2,500円
愛知人形劇センター会員1,900円（事前申込に限る）

最終選考上演団体のご紹介

CORONA（光環）（愛知県・名古屋市）
『デヴォ・ルチ』

◉メッセージ
インドネシアの伝統芸能である影絵人形劇ワヤン・クリは、単に娯楽として親しまれているのみならず、古くから儀礼としての役割も担っており、本来は人と神々の世界を結ぶようなものであったと考えます。本作品では、そのようなワヤンの哲学的な価値、また芸術としての価値を考察し、映像と音楽との融合という現代のテクノロジーを使用した新しい方法によって再構築し、さらに深めようと試みています。伝統芸能の形式から逸脱することを恐れず、伝統芸能の本質を深めようとする試みとなります。

◉プロフィール
2019年6月結成。ジョグジャカルタ出身のダラン（伝統的影絵芝居の人形遣い）として国内外で活動しているAnanto Wicaksonoを中心に映像担当のYüiho Umeoka、音響担当の山本雅史の3名にて活動。主な出演歴に、2019年12月:Lacking Sound Festival、台北偶戯館（ともに台湾）、2020年2月:サウンドパフォーマンス・プラットフォーム2020（愛知）、2022年9月:六本木アートナイト（東京）がある。

魁士（神奈川県・川崎市）
『Dumbshow』

◉メッセージ
タイトルの『Dumbshow』とはセリフを使わないで意思を伝える為に使用されるマイムの事です。本作品でもセリフをほとんど使わず、パントマイムを使ったシチュエーションコント、コメディパフォーマンスをおこないます。ある場所のある部屋に暮らす神経質な一人の男の話。小さな事が気になってしまい眠れなくなってしまう、仕事が手につかなくなる。そんな誰もが体感したことがある出来事を面白おかしく演じています。

◉プロフィール
2014年からコント、演劇、映画制作し、コントグループを結成してお笑い活動をする。2016年から東京で吉田明美パントマイム企画スクールに入所し、パントマイムを学ぶ。その後、様々なイベント、ライブなどに出演。年に一度パントマイムソロ公演を開催し、上演している。日常におこる出来事を面白おかしくパントマイムや簡単なマジックを使って演じている。見てくださった方が笑っていただける作品作りを心がけている。

NPO法人**舞台アート工房・劇列車**
（福岡県・久留米市）
『どんぐりと山猫というはなし』

◉メッセージ
『どんぐりと山猫』は、ナンセンスでコミカルな童話です。でも物語のラストに、主人公一郎は我が家の前で孤独を背負って佇み、後悔します。展開とラストの異様なまでのコントラスト。それはなぜ？ ここへのこだわりから、この人形演劇の主人公一郎は、現代の「学校にいけないこども」となったのです。この上演作品は楽しんで観る方もいます。まるで我がことのように観る方もいます。そして、「学校にいけないこども」は自分のこととして観てくれます。私たちの作品は、そんな作品です。

◉プロフィール
私たちは「どんなこどもにも劇を！文化を！」をミッションとしたNPO。人形劇団というよりも社会課題の解決に文化からアプローチする団体、そういった方が正確かもしれません。人形劇創造と社会課題の解決を両立させていくと、どうしても歩みがのろくなります。二つの分野をつなげながら歩むのです。かたつむりのような歩み。でも自負があるのです。それは地に足をつけて歩んでいること。だからへこたれないこと。これが、私たち劇列車です。

待望！P新人賞2020受賞団体が新作で凱旋

コロナ禍で公演延期を余儀なくされていたP新人賞2020の劇団野らぼうが、受賞記念公演のため新作を携え、ひまわりホールに登場します。これまでの「人形劇」に捕らわれない斬新なアイデアと若い感性で客席を挑発してくる期待のカンパニー。圧倒的な熟量で観客を舞台に引き込みます。乞うご期待！

P新人賞2020受賞記念公演
劇団野らぼう『ロレンスの雲』
3月21日（火・祝）15:00
損保ジャパン人形劇場ひまわりホール
作・演出：前田斜め
出演：くずおか由衣、成田明加、深沢豊　音響・照明：哲

前売2,000円　当日2,200円
愛知人形劇センター会員1,800円（事前申込に限る）
予約フォーム▶https://aichi-puppet.net/ask_reserve/ticket_reservation/ticket_p-newface2020_kinen/

撮影：Yohei Ito

撮影：滝澤テイシ

「劇団野らぼう」からのコメント

私たちは、長野県松本市において主に野外で演劇を行う劇団として活動しています。これまでに大きな人形を用いた作品や、非劇場空間において上演する演劇作品など、その場その場の環境や条件に合わせて表現したいことを創作してきました。その興味は、演劇作品の内容はもちろんのこと、演じられる空間そのものやメディアとしての演劇、また人形やテクノロジーなど様々です。徐々に県外での公演の機会も増えてはおりますが、まだまだ自分たちの手の届く範囲で活動を続けています。今回、名古屋のひまわりホールにて公演できることを嬉しく思います。この機会にぜひ劇場へ足をお運びいただけたら嬉しいです。